春季大会発表要旨

特集
人文知の潜勢力
――戦後社会運動を／から問い直す

【特集の趣旨】

運営委員会

本企画は、戦後から現代まで断続的に生起する無数の社会運動の軌跡と、その中で哲学・史学・文学を横断する人文知が果たした役割に目を向けるものである。人々が試行錯誤を繰り返しつつ言葉や思想を紡ぎだした運動の現場で息づいてきた広義の人文知。そのあり方を、史的視野を広く取りながら問い直すことは、現在の人文知の社会的・文化的意義とは何か、そして文学が今後果たすべき役割とは何かを再考する契機となり得るのではないか。

戦後の社会運動の歴史を振り返れば、多様な人文知との深い関わり合いが確認できる。対日講和条約・日米安保条約が締結された一九五〇年代には、内灘や沖縄、砂川などで軍事基地に対する反対の声が上げられ、アカデミズムの枠を越えた人文知が運動の中で育まれていった。続く一九五九年から六〇年にかけての安保条約改定に異を唱えた反対運動、そして一九六八年を一つの頂点とする全共闘運動では、大学知識人・思想家・文学者、さらには学生が、労働運動や市民運動と連帯しながら形作る新たな抵抗のあり方が提示されていく。しかし一方で、これらの運動が一九七二年の連合赤軍事件をも生み出し、学生運動の可能性と不可能性の臨界を様々なかたちで示したことは忘れてはならないだろう。では、こうした光と陰をはらんだ運動のうねりのなかで、人文知が担った役割とは何だったのか。例えば大江健三郎の運動参加や吉本隆明のポレミカルな発言・著作といった文学者からの応答は、いかなる意味を持ち得たのだろうか。こうした問いの検討は、過去から逆照射するかたちで、現在の人文知がなし得ること／なし得ないことを明らかにすることにもつながるはずである。

近年の大学改革における人文学軽視の風潮を鑑みれば、かつてそれらの知が担ってきた役割は既に失われているのかもしれない。しかしその痕跡を基点にして、過去と現在の断絶と接続をともに意識しながら社会運動とそこで育まれた文化や文学を捉え直すことは、アカデミズムの枠内に内向しがちな人文知の可能性を再び開き、その潜勢力のありかを示す第一歩になるのではないか。本企画が、この難題を解く手掛かりをつかむ契機となることを期待したい。

吉本隆明と竹内好

――「世界認識の方法」と「方法としてのアジア」

高橋順一

昨年（二〇一五年）は「戦後七〇年」にあたるため、「戦後」とは何だったのかをあらためて問おうとする議論が数多く登場した。しかし私はそれらの議論に重大な欠落があるのを感じずにはおられなかった。それは、「戦後」という一つの歴史空間が何を基礎にし、どのように成立したのか、そしてそこで目ざされていたものが何だったのかを巡る議論がほとんど見られなかったことである。典型的なのは改憲派と護憲派の議論である。改憲派は現憲法をアメリカの押しつけであるから一刻も早い改憲が必要だと声高に主張するだけで、戦後の歴史への視点がまったく欠けているし、護憲派は日米安保体制と現憲法の象徴天皇条項によって護られてきた「戦後」空間を歴史的視点抜きに物神化するだけである。どちらにも「戦後」の歴史や理念への問いかけがまったくといっていいほど欠落している。だからこそ「従軍慰安婦問題」、あるいはそれが象徴する、私たちの「戦後」理解・認識において空白、暗部、盲点となってきた問題が繰り返し「抑圧されたもの」として回帰してくるのである。

この空白、暗部の回帰から浮かび上がってくるのは、アジア・太平洋戦争を通して、あるいはより大きく見れば近代の歴史総体を通じて、植民地支配や侵略、簒奪や凌辱の中で関係しあうことを強いられてきた日本――アジアの最底辺の民衆層の言語を絶する経験である。それは正史から排除された歴史の沈黙の領域に他ならない。ここへと迫らない限り、私たちにとって「戦後」の真の姿は見えてこないはずなのだ。私は今、「戦後」を真に認識するためには、この空白、暗部へと迫ろうとした少数の思想家・文学者たち、すなわち吉本隆明、竹内好、谷川雁、森崎和江、上野英信、宮本常一、石牟礼道子らの残した仕事を振り返ってみる必要性を痛感している。彼らの仕事の意味を、「戦後」の終焉、「戦後」からの転回が叫ばれる今だからこそもう一度捉え直さねばならないのである。今回はその中から吉本隆明と竹内好を取り上げてみたいと思う。

ポスト「一九六八年」における知の探究

――「生活民」としての／のための知を求めて

安藤丈将

「文系学部廃止」をめぐる議論に象徴されるように、知のあり方、それを生み出す場である大学のあり方、さらには、そこでの学びのあり方が問われている。日本の現代史を振り返ってみると、このような問いかけがなされるのは、決して新しいことではない。とりわけ一九六八年前後の大学や学問においては、知の権威主義という古い問題と知の商品化という新しい問題が交錯しており、この渦中を生きた青年たちが中心になって、理想的な知のあり方を求めて討議し、キャンパス内でそれを実現しようとした。宇井純が指摘するように、その言葉は「舌足らず」であったかもしれないが、問題提起自体は多くの人びとの心に刻み込まれた。

こうした問題提起が知と学びを問い直す具体的な実践の創出につながっていったのは、「一九六八年」の祝祭的な出来事が終わった後である。学生運動への動員が急速に衰退する中、学ぶことと社会を変えることとの接合を目指した学習運動が生まれた。本報告では、最初に、ポスト「一九六八年」の運動の展開を追いながら、自主講座や寺小屋といった都市部で実践された学習運動の事例を取り上げ、「生活民の学」や「野の学」という言葉に象徴された学びのあり方について考察する。特に、学習運動において、公害に生活を脅かされる人びとの暮らしの現場が知を問い直していく上での鏡と位置づけられたことに注目していく。

以上の学生運動から学習運動の展開を踏まえながら、次に、故郷を離れ東京に出て学生運動に関わった後、地元に戻り「百姓」として生きる選択をしたアクティヴィストの歩みを取り上げる。彼が三里塚と沖縄の運動と出会い、自分にとっての「現地」を発見していく軌跡をたどりながら、地域の運動を支える知がいかなるものであったかを論じていく。このように、報告では、ポスト「一九六八年」の知の探究を追いながら、社会を変えるという営みを支える知のあり方について考えたい。

人文知の構造的転換点
――一九八四年の一瞬から

小森陽一

一九八四年一二月、岩波書店から、季刊雑誌「へるめす」が創刊された。編集同人は建築家磯崎新、詩人大岡信、作曲家武満徹、哲学者中村雄二郎、文化人類学者山口昌男、そして小説家大江健三郎であった。専門領域を異にする、しかし同時代の知と芸術を代表する編集同人による雑誌の創刊は、バブル経済に突入（一九八五年九月プラザ合意以後）する直前の、この国の人文知の構造的な転換を象徴していた。

私が成城大学文芸学部で教師として生活しはじめたのは、一九八二年四月からだが、バブル経済以後に「ニューアカデミズム」と一括されてしまう状況とは、明確に異なる知的復興が企図されていたことを強く感じていた。

「へるめす」創刊号に大江が発表したのは『浅間山荘』のトリックスター」である。

「トリックスター」とは、文化人類学者山口昌男が一気に流行語化させた概念である。ヘルメス神がそうであるように、善と悪、秩序と混乱、文化と自然といった、イデオロギー化された二項対立的世界を、自由に行き来し、世界を流動化し、活性化するのが「トリックスター」。山口は意識的にそのような役割を担っていった。

七九年のソ連のアフガン侵攻、八〇年のモスクワオリンピック・ボイコット以後一気に東西冷戦が緊迫する中、八四年四月ゴルバチョフが外交委員会議長になる中で、境界ごえの可能性が見えて来た中での、人文知の再編成の試みが始まっていったのである。

既存のアカデミズムと、既成のマルクシズムが同時に批判的に相対化される中で、同じ年の三月、日本エディタースクール出版から雑誌『列島の文化史』が創刊されている。歴史学と民俗学の対話が始まったのである。こうした動きの中で、網野善彦を中心としながら、天皇制の基本構造の問い直しが行われていったのである。一九八四年の一瞬に見えた人文知の可能性を明らかにしたい。

春季大会研究発表

第一会場（512教室）

個人発表

「非人情な結束」としての自費出版同盟はいかにして可能か？
――昭和初期の雑誌『文党』の超党派性を事例に――

大尾侑子

一九二五年七月、『文芸時代』を脱退した今東光によって雑誌『文党』が発刊された。発刊に際して東光は、『文党』が「文藝上の趣味とか傾向とかを一つにするところから結束したのでなく、全然他の利害関係から結束した」とし、その理想像を「政党などと同じやうな道程を辿つて、組み立てられた非人情な結束」であると述べた（今東光「文党に就いて」『文党』一九二五年七月号 十五頁）。それは将来的に、「いろいろの組合となり、協会となり、同盟となり、結社となり、社会的集団にまで生成しなければならないところのものだ」（同上）という。

文芸雑誌が、なぜ「非人情な結束」に基づき、最終的に社会的集団を形成するものとして想定されねばならなかったのか。そこには、大きく二つの背景があったと考えられる。第一に、「依頼しない原稿は掲載しない」という既成文壇の慣例、第二に、同人らによる「横暴な資本家である出版業者に対して、被搾取階級に属する吾々文筆労働者」という自己認識である。そこで、「どうにか独立して自警の道を講じたい」（同上 十七頁）と考えた同人らは、単なる同人雑誌ではなく社会的集団へと生成しうる「自費出版同盟」の組織化を企てたのであった。

つまり「非人情な結束」とは、立場の同一性によって担保されるのではなく、近代化がもたらした文壇の権威性と、そこに寄生した資本家としての出版業者という〝共通の敵〟によって初めて凝集しうるネガティブなものだったと言える。だが、既に多くの党派が林立していた当時、こうした超党派的組織を形成し、その存在意義を世間に表明するには、ある種の「戦略」が不可欠だったはずである。そこで本発表では、雑誌創刊時に「桃から生まれた桃太郎」調の「文党歌」を高唱して練り歩いた街頭での示威運動をこの「戦略」と仮定し、同人らが「非人情な結束」を可能にする為のいかなる戦略として意味付けていたのかを考察する。

「会社員小説」の方法
――伊井直行「星の見えない夜」論

川﨑俊

本発表は伊井直行（一九五三～）の小説「星の見えない夜」（初出は『群像』一九九一・二）と、評論『会社員とは何者か？――会社員小説をめぐって』（講談社・二〇一二）を中心に取り上げ、「会社員小説」と、「会社

員」と小説との関わりをめぐる論考（＝「会社員小説」論）との関連付けを主な目的とし、ひいては伊井の活動全体の輪郭を捉えるための足がかりとなることを目指す。

伊井は、日本の近代において、会社員と小説がほぼ同時に誕生したことに着目しつつ、会社員は小説において「十全な登場人物になりえないもの」（加藤弘一との対談より）であったとしている。すなわち、明治期以降は大多数の労働者が「公私の分断」された会社員であることが自明の前提とされてきたため、そのような人々を表現する方法が従来の小説においてはほぼ抜け落ちていたことを指摘している。

近年は伊井自身が『会社員とは何者か？』において、サブジャンルとしての「会社員小説」を定義しつつ、会社員と小説の表現との関わりから注目すべきものを取り上げているが、そこで一九八九年から一九九一年にかけて発表した、独身の男性会社員を主要な登場人物とする「さして重要でない一日」「星の見えない夜」という自身の二つの小説を「会社員小説」の系譜に位置づけている。伊井の創作活動自体も今日まで顧みられる機会が極めて少なかったが、一連の「会社員小説」の文体や登場人物の人称の問題にも端的に見られるように、小説の表現の問題に対して極めて自覚的なものを多く書き続けている。当時は「テレビドラマ的な平明さと安心感ばかりがきわだ」つ（渡部直己）とされた「星の見えない夜」にも、そのような特徴が認められ得る。加えて、一連の「会社員小説」に冠婚葬祭や家庭内労働に関する記述が反復されていることにも着目し、より多角的にその試みを捉え直すことも射程に入れたい。

パネル発表

「浅草」を歩く

――『浅草文芸ハンドブック』を編みながら

能地　克宜・棚沢　健
上田　学・金井　景子
堀　郁夫

現在の浅草は多くの観光客で賑わっている。今日においても浅草はまぎれもなく東京の有名観光スポットの一つである。浅草という街は江戸時代から浅草寺参拝客を取り込むかたちで食・土産・娯楽といった消費において発展してきた場所でもある。一八七三（明治六）年に浅草寺境内が公園化され六つに区分けされて以降、特に六区は東京の最先端の娯楽スポットとして君臨してきた。浅草富士、パノラマ館をはじめ、日本の活動写真館発祥の地としても人々に魅力を与えてきた。また、これまで多くの文学者たちが浅草の魅力に触れ、そこを訪れ、あるいはそこに住み、浅草

で生まれた作家も含め、多くの文学作品が生み出されている。

これまでもこうした浅草の街あるいは浅草を舞台とした文学作品を分析した書物が、数多く出版されてきた。それらの多くが浅草を歴史的、時系列的に捉え、整理してきたと言える。しかし、そこには文学者たちを含めた多くの人々がなぜ浅草を訪れるのか、浅草を歩くというのはどういうことなのかについて、読む者を触発しつつも、明確な答えを出してきたわけではない。今回のパネルに集う報告者たちは二〇一三年より、『浅草文芸ハンドブック』の執筆・編集に携わり、書物を起点にして浅草を訪れるとはいかなることか、もうすでに書物の中にしかない「浅草」の遺跡を訪ねるとはどういうことであるのかについて、現在の浅草を訪れ、歩くことを通じて考察してきた。

二〇一六年の段階で、浅草は訪れる人々にどのような顔を見せているのか。その姿はかつて文学者たちが捉えた姿とどのように差異化され、あるいは一貫性を保ち続けてきたのか。浅草を実際に歩いてみると、浅草を「浅草たらしめているもの」が確かに存在することに気づかされる。そして、浅草という街の領域はこれまで拡大と縮小を繰り返し、現在も絶えず移動し続けている。また、浅草はこれまで、震災や戦災、一九六四（昭和三九）年の東京オリンピック以後の衰退など、何度も浮沈を繰り返しながら現在に至っている。さらに言えば、どこから浅草に入るのか、どのような交通手段によって浅草を訪れるのかによって、また、浅草の内側に住む人々と浅草の外側から訪れる人々では、浅草という街が見せる顔も異なってくる。浅草はこうしたいくつもの「際」を組み合わせることによって種々の顔を人々に見せ続けてきたのであり、浅草をめぐる文学作品には、そうした無数のフェイズが織り込まれてもいる。

本発表では、主に以下の四名の作家・作品に焦点を当て、かつて文学者たちが文学作品として提示した「浅草の歩き方」と、発表者である編集委員のそれを交差させ、文学作品を読みつつ、今の浅草を歩くことで可能となる街の記憶の掘り起こし――その可能性と課題について考える。

まず、代表者である能地克宜が本書編集のコンセプト及び主旨説明を行った後、室生犀星「幻影の都市」ほかを例に、浅草を歩くことで見えてくる街や人々の姿から、浅草を浅草たらしめているものは何かについて検討する。樹沢健は貴司山治「地下鉄」ほかを例に、固着的な価値通念を転倒させ、秩序や特権階級を笑いとばす、浅草に潜在するカーニバル的な批評性について検討する。上田学はビートたけし「浅草キッド」ほかを取りあげ、映画・演芸の観点から、時代を経て多様に変形しつつ、芸能を継承する都市空間としての浅草について考察する。金井景子は高見順「東橋新誌」を取りあげ、戦争によって商売替えを余儀なくされる街の住人たちに着目し、皮革産業を軸として、浅草の生産の街としての側面を追尋して行く。また、堀郁夫は本書編集者の立場から本書編集過程の補足と実際に歩いた浅草の姿について報告する。

こうしたパネラーの発表をベースにしつつ、浅草はこれまで人々にどのような姿を見せてきたのか、人々は浅草に何を求めているのか、浅草を歩くということはどのようなことなのか、現在浅草の内側に生きる人々の声と交錯させるだけでなく、フロアとの討論を交えて検討していきたい。

また、合わせて同時期に小規模な浅草に関する文学展を同地で開催する予定であり、これに関しても発表の中で触れていく予定である。

第二会場（521教室）

個人発表

「格差」・「差異」・関係性
――二〇〇〇年代初期における結婚と女性「格差」をめぐる言説を読む

徐　小　雅

二〇〇〇年代初期の日本社会は、長期不況と不安定な労働現状、及び経済格差の拡大という現実に直面していた。格差の再定義と再解釈が試みられる一方、日本語空間において、「ニート」などの借用語や新語で雇用と労働の現状を捉え、カテゴリ化しようとする動向も見られた。しかしほぼ同時期に、結婚をめぐる言説において、女性同士の「差異」と「格差」は複雑に絡み合っていた。

酒井順子の『負け犬の遠吠え』（二〇〇三年）から発祥し、「三〇代以上・未婚・子ナシ」の女性による自嘲的な呼称である「負け犬」は、メディアでの流用と拡散により流行語となり、独身／既婚女性の対決として大いに取り上げられた。「負け犬」の概念自体は本来、自嘲に見せかける処世術であることは指摘されたが、女性の「対立」の深層に、酒井の「負け犬」と「勝ち犬」は実際同じ水準の経済基盤に立ち、ある種の連帯まで発展する可能性も読み取られる。だが独身／既婚の「差異」だけを注視する言説空間において、小倉千加子が嘗て指摘した結婚をめぐる経済などの外部的要因が排除され、女性同士の関係性は擬似的な「格差」に掏り替えられた。

近い時期に発表された角田光代の長編小説『対岸の彼女』（二〇〇四年）は、別方向から女性同士の「差異」を提示した。小説の中、三〇代の主婦と同世代の独身女社長の「現在」と、二人の女子高校生がいる「過去」は交錯している。「過去」と「現在」の相互参照により、図式化された独身／既婚の対立が緩和し、物語は女性の友情と連帯感に収束される。物語の底に存在する外部的不均衡は解消されていないが、解消の必要性はそもそも描かれない。

本発表は、二〇〇〇年代初期のエッセイと小説を取り上げ、時代背景と「格差」「差異」

などの用語に注意を払い、結婚をめぐる言説で見られる女性同士の関係性を分析し、「差異」は如何に表象され、またそれは実在の「格差」と如何に絡み合うかについて考察する。

ライトノベルにおける挿絵のイデオロギー

――〝男の娘〟表象を題材とした作家横断的テーマ形成過程の分析――

松　永　寛　和

本発表ではライトノベルの本質的な特徴として語られるアニメ・マンガ的な挿絵の存在がテーマ生成の過程にどのような影響を与えているのか、幾つかの資料と〝男の娘〟を巡る言説を例に明らかにしていく。

イデオロギーとは、ここでは世界観の意味である。元々、江戸時代では小説には挿絵が付くのが一般的だった。それが近代文学において排除されたのには本質的な問題が孕まれている。坪内逍遙は『小説神髄』の中で江戸の文芸が世間的な勧善懲悪を表現するものばかりであることを批判し、作家個人が見た世界を描写することで江戸の文芸の影響圏から抜け出そうとした。ここには集団的な価値観から個人の価値観の表出へという方向転換がある。その際、本文と絵とで共同制作になってしまう挿絵は必然的に排除されたのである。ある種の霊感を備えた作家が世界の真理に辿り着き、読者はその内面に迫ることで世界の真理に触れるという読解の文化も一作家一作品という制度があるからこそ成立した。

近代文学における挿絵の排除にはイデオロギー的な性格が見え隠れしている。同様に、挿絵を積極的に受け入れるライトノベルにも新しい世界観＝イデオロギーが見て取れる。ライトノベルはイラストレーターの地位が高く、もう一人の作者と言えるほど共同制作的な性質を持っている。作品は作家個人のオリジナリティを表現する場ではない。ライトノベルは世間的な価値観や先行する作品に見える流行、キャラクターの類型等を元に、それに対する批評性を表現する場となっている。この特徴は作品のテーマ生成にも影響を与えている。

〝男の娘〟と呼ばれる、女性的な見た目を持つ男性という表象は当初、ギャグとしてライトノベルの中に登場した。しかし、幾人もの作家が書き継いでいくうちに、徐々にジェンダー的な問題意識が掘り下げられるようになっていった。ライトノベルではテーマも作家個人によってではなく、作家横断的に生成されるのである。

パネル発表

近代小説における描写と視点

――岩野泡鳴の理論的言説

中村ともえ・久保　昭博
河田　学・西川　貴子
（ディスカッサント）金子　明雄

近代日本では、小説における描写と視点について、どのような考察が行われてきたか。それは西洋近代の小説を規範とする物語論の議論と重なるのか、重ならないのか。本パネルでは、西洋近代小説と日本近代小説の接点とずれを、描写と視点という観点から確認することで、「日本の文学理論」のあり方の一端を剔出することを主眼とする。

西洋文学理論の研究者と日本近代文学の研究者で構成される本パネルメンバーは、これまで、日本において文学・芸術理論がどのように受容されてきたのか、あるいは、日本「独自の」文学・芸術理論はあるのか、またあるとしたらどのようなものなのかということについて、共同研究を行い、その成果をまとめた『日本の文学理論――アンソロジー（ベータ版）』（京都大学人文科学研究所、二〇一五、非売品）の編纂にも携わってきた。アンソロジーでは多岐にわたる文学理論の重要事項を取り上げており、描写と視点をめぐる問題はその中の一つにすぎない。とはいえ、明治期から現代に至るまで、日本で小説を語る際に、たびたび俎上にあげられてきた（ている）描写と視点という切り口は、とりわけ日本近代小説の特質を考える上で、看過できない興味深い問題を有していると思われる。

西洋文学理論との邂逅の中で、描写に関する理論的な検討が日本で行われたのは、一九一〇年頃であった。その際、描写を論じるべき重要なトピックとして見出したのは、自然主義と呼ばれる文学集団である。彼らの議論のなかでは、描写はつねにリアリズムをいかに確立するかという問題と結びつけられてきた。その集団の中心人物であった田山花袋は、作者が対象に対して距離をとって客観的に書く「平面描写」を提唱した。

一方、同じく自然主義の作家の一人である岩野泡鳴はこれを批判し、作者が特定の作中人物一人に主観を移入する「一元描写」を主張した。自然主義の描写論が「描写」を定義し、その重要性を主張するものではあっても、方法について何事かを論じるものとはなり得ていなかったのに対し、泡鳴のこの主張は、独自の方法を理論的に示していた。泡鳴の一元描写論は、生田長江をはじめとして数々の意見を呼びこむなど、ここを起点に描写のあり方や視点の位置に関して活発な議論が展開されていく。

今回のパネル報告では、この岩野泡鳴の理論的言説に焦点をしぼることで、日本近代小説において描写と視点に対する意識が内包していた問題に接近する。

西川貴子は、明治期の日本近代小説を語る上で描写や視点という概念がどのように意識化されてきたのかを概括し、問題提議を行うとともに司会進行を行う。中村ともえは、文学理論家としての泡鳴の問題意識を概観する。「一元描写」と呼ばれる彼の描写の方法がどのようなものであるか、泡鳴自身の小説にも触れつつ、作者と主人公の関係に着目して考察する。久保昭博は、物語論を中心とする西洋現代の文学理論において描写がいかに

位置づけられているかを確認し（「物語」対「描写」、「語ること（telling）」対「示すこと（showing）」）、そうした概念装置との比較の上で近代日本の描写論とその系譜における泡鳴の特徴を検討する。河田学は、泡鳴のいう一元描写を、西洋現代の物語論でいう視点（焦点化）の問題として位置づけ、双方の背後にある創作観との関連を、とくにヘンリー・ジェイムズとの比較から考察する。

以上のパネル報告を踏まえ、金子明雄をディスカッサントに迎え、会場を交えた討議を行う。日本近代小説が西洋文学理論と邂逅する中で抱えた問題と可能性を炙り出したい。

第三会場（522教室）

個人発表

芸者の恋
――芥川龍之介「片恋」論――

金子佳高

芥川龍之介の「片恋」（「文章世界」大正六年一〇月）は、「友人」が「自分」に語るという体裁を取る。「友人」は、かつて飲み屋の女中をしていた浅草生まれのお徳に、芸者として再会し、彼女が活動写真の西洋人俳優に片恋をしていることを聞かされる。「友人」はひょっとしたら活動写真の俳優に恋をしたというのは嘘で、本当は自分たちの中に片恋の相手がいたのかもしれないと述べる。

本発表では、「片恋」が芸者に焦点を当てた芥川最初の作品であることに注目し、この小説と大正五年の遊蕩文学撲滅論争で問われた価値基準との距離性（接近と離反）を見取りたい。

論の前提として本作が永井荷風の「名花」（「三田文学」明治四五年六月）を典拠としていることを指摘する。両作品は、主人公の芸者の境遇や登場人物間の関係・小説の構造などに類似性が認められる。

また、女中・浅草・活動写真・芸者といった表象に着目しつつ、先行研究において弱い女性として読まれてきたお徳を、強い女性として規定し直す。さらに、そうしたお徳の強い片恋を、「友人」と「自分」がホモソーシャルな関係性の中に回収しようとする構図を読み解く。

その上で、本作が、赤木桁平の「「遊蕩文学」の撲滅」（「読売新聞」大正五年八月六・八日）を契機に起こった遊蕩文学撲滅論争の影響を受けていることを指摘する。芥川は秦豊吉宛書簡で「「遊蕩文学」の撲滅」にリアルタイムで言及しているのであるが、その際に、遊蕩文学でありながら佳作として絶賛したのが荷風の「名花」であった。遊蕩文学撲滅論争においては、理知の意義が問われ、また、弱いものに対するまなざしの重要性が論じられた。こうした大正五年の文壇の価値基準に芥川が敏感であったことは、書簡の記述を通し

て分かる。理知を気取る友人や芸者の恋を描く「片恋」を通して、芥川と遊蕩文学撲滅論争の距離性を見取りたい。

中原中也「骨」論

宮﨑三世

中原中也の詩「骨」（『紀元』、昭和九年六月）では、語りが運ぶにつれ、骨に付加的な要素の全てが骨から取り去られる。第一連からは、「生」に対する否定的な感情が読み取られることがある。しかし、言葉がどのような繋がりの中に置かれているのかを確かめてみると、あえていえば、肉を破って出てきた骨には「苦労」も「けがらはし」さもないと言われている。「しらじらと雨に洗はれ」という表現からは、浄化という意味合いが生じかねないが、第二連では「ただいたづらにしらじらと」と言葉が添えられ、その解釈の方向を用心深く遮っている。骨の生前のあり方とは、「可笑しい」と評価されうるだけの希薄なつながりが点綴されるに過ぎない。従来、骨には霊魂が宿っていると読まれている。しかし、第四連の「霊魂は」以下の箇所は見かけ以上に重要な働きをしており、骨が霊性を持っているという伝統的解釈にこの詩が収まる可能性を、婉曲に打ち消している。最終連で「しらじらと」という形容が繰り返される時、それは何らかの隠された意味を持たない骨のあり方を表わしている。

この詩は、冒頭の一行から詩の終わりまで、言語の表現の力を自在に使ってみせている。第一行は、自己の骨を見る自己という事態を一瞬で出現させる、絵にも音楽にも表現できない、言葉でのみ実現される表現である。技法とも意識させないほど巧みに、行を変える事で文体を変え、また、詩句を連を超えて反復して強調しつつ、かつ言葉を補って語の意味の重点を変える。言語の様々な表現を駆使して、人間の中から、人間的な一切の要素を捨てた、いかなる隠れた意味も持たないただのモノとしての骨を取り出し、それが「僕」であると突き出してみせる。この詩の面白さ、独自さは、そのような骨の意味、意味ならざる意味を見いだした点にある。

認識の転換とメタフィクション
——芸術論の実践としての三島由紀夫〈菊田次郎もの〉

中村佑衣

本発表は、三島由紀夫の作品のうち菊田次郎を主役に据えた「火山の休暇」（一九四九年十一月）、「死の島」（一九五一年四月）、「旅の墓碑銘」（一九五三年六月）の連作、いわゆる〈菊田次郎もの〉を、メタフィクション構造と認識の価値転換を主旨とする芸術論の実践と捉えて論じる。

「旅の墓碑銘」は「私」の登場を契機に、「私」と次郎が、次郎によって〈書かれる〉存在であることを明らかにし、入れ子構造及びメタフィクションとしての性質を示す。私達読者が〈菊田次郎もの〉を順に読み進める場合、三作目「旅の墓碑銘」自体を「菊田次郎の草稿」と措定することで、他の二作品も同様に、次郎を書き手とする旅の叙述であったと再認識することになる。このように作品がそれ自体の構造に自己言及することで、読者側の作

品に対する認識を変化させ、一度読み終えたはずの叙述をも新たな切り口から読み直させようとする特徴が本作品群にはある。そうした作品構造の中で、「私」は次郎によって〈書かれる〉存在でありながら、次郎自身や次郎の叙述に対して批評的な立場をとる。〈音楽〉を巡る次郎との認識の差異に「私」が言及するのはその一例だ。異なる視座を示すことで〈菊田次郎もの〉の叙述に対する読者自身の認識の変化を促す「私」の存在は、本作品群における自己言及の要と言える。

加えて生涯にわたり三島の思想や作品に多大な影響を与えたとされる哲学者、フリードリッヒ・ニーチェの『悲劇の誕生』を援用し、次郎のアポロン的「外面」の認識と「私」が示唆するディオニュソス的認識の対照性、及びディオニュソス的な価値をも認めるようになる次郎の認識の転換を指摘する。

そして本作品群の物語内容は〈書かれる人〉次郎の認識の転換であり、物語言説としての〈菊田次郎もの〉自体は〈書かれる人〉次郎を表象物とする、すなわちメタフィクションを活用した〈書く人〉次郎が最終的に実践した芸術論として読む。